

展覧会

「大・南大萱展－瀬田のいまむかし」の報告書2つ

丸山 徳次

2007年4月19日から26日まで、里山学・地域共生学ORCが国際文化学部と共同で主催した「大・南大萱展－瀬田のいまむかし」が開催されました。龍谷大学瀬田学舎RECホールでの7日間の開催で、1000人を超える来館者があり、大きな反響を得ることができました。南大萱資料室を運営されてこられた有志の方々のこれまでの努力の成果を、大学が場を提供して展示していただくことを意図した本展覧会は、里山ORCが目指す「地域共生学」という側面において、期待以上の成果をあげることができたと思います。

この展覧会について、次の2つの報告書が作成されました。

- (1) 報告書「大・南大萱展－瀬田のいまむかし」里山学・地域共生学ORC、2007年7月
- (2) 『南大萱という世界』吉村文成編集、南大萱資料室監修・発行、2008年3月5日

(1) の報告書は、若原道昭学長に提出したものであり、以下にそのまま掲載します。今日強く求められている大学の地域貢献という面においても、大いに意義のあった本展覧会は、大学が有する潜在的な能力から見ても特色のあるユニークなものだと思われるので、反省点を含めて大学の最高責任者に報告する義務があると考え、作成しました。

(2) は、本展覧会の企画者である吉村文成氏（里山ORC研究スタッフ、龍谷大学国際文化学部教授）が編集したグラビア冊子です。「会場から」「歴史編」「民俗編」という3つのパートに分け（全106頁）、多数の写真・図版を使って「大・南大萱展」を具体的に紹介していますし、最後の「資料編」では、(1) の報告書の抜粋を含めたいくつかの関連資料を掲載し、全体として本展覧会のすぐれた記録となっています（展覧会場には、

国松巖太郎氏の風景画も多数展示されましたが、残念ながら本冊子には掲載できませんでした。本グラフィア冊子は、今後も広く利用される価値をもったものだと確信しますし、里山ORCの、特に研究班2の大きな成果の一つとして評価いただけるものと思います。

本展覧会開催の経緯については、以下に掲載する報告書中の吉村文成氏の「開催のねらいといきさつ」をお読み下さい。会場で配布された「開催および展示品について」には、次のように述べられています。

「限られた地域についての展覧会ですが、かえて『人と自然のかかわり』の変遷がこの上なく具体的に示されており、『人間と自然の共生』についての理解を一層深めることができると思います。また、そうした地域の歩みが決して孤立したものではなく、広く日本各地や世界各地の人々の歩みとつながっていることを理解する機会になることを願っています。」

この願いは、吉村氏が編集したグラフィア冊子が『南大萱という世界』というタイトルを有していることにも表明されています。そして、本展覧会がこの願いを、少なくとも届けることができたと思っています。

また、本展覧会のポスターには、次のような言葉が記されています。
「忘れていた昨日のことを思い出してください。地域がいまに至った歩みの跡をたどってみてください。そこに探してください、世界のつながりを。」

本展覧会開催にあたって協力をおしななかつた国際文化学部の学生たちをはじめとする若い世代の人々が、地元の方々とともに、地域の歴史を振り返り、世界と未来について考えるヒントをたくさん得ることができたと思っています。

グラフィア冊子『南大萱という世界』を編集された吉村文成氏に敬意を表するとともに、本報告冊子を監修され、本展覧会に全面的にご協力下さった松田庄司室長をはじめとする南大萱資料室の方々に改めて心より御礼申し上げます。